令和５年度　学校評価総括表　伊丹市立こうのいけ幼稚園　　R6.3.28

教育目標	豊かな心をもって、生き生きと遊ぶ子どもの育成　―不思議発見！わくわくいっぱい！笑顔あふれるこうのいけ―
重点目標	安全・安心な教育環境のもと、「子ども主体」の遊びを支え、子どもの主体性を育む教育を推進する

項目		重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者評価
学力の向上	生きる力の基礎を育む	主体性の育み	・遊び込む子どもの姿を捉え、内面の育ちを支える保育を進める。	・遊び込む子どもの姿を捉えたエピソード記録のカンファレンスを学期に２回程度行い、多様な幼児理解や子どもの育ちを支える教師の役割について園職員だけでなく共同研究園の職員と共に学び合う。 ・日々の園庭環境の構成の中で、教師間の連携を図り、遊び込む姿につながる遊びの環境を整える。 ・保護者アンケートにおいて、「幼稚園は、子どもの発達や興味関心に応じた保育を行い、子どもたちの意欲や主体性が育まれるように努めている」「子どもは、幼稚園で『遊び込んでいる』と感じる」「子どもに経験させたい遊びを工夫して取り入れていることをドキュメンテーションやクラスだよりから感じられた」と回答した割合が、それぞれ９０%以上になる。	A	・遊び込む子どもの姿を捉えたエピソード記録をもとにしたカンファレンスを１・２学期に２回ずつ、３学期に１回行い、様々な幼児理解を深めることができた。また、年間２回共同研究園でカンファレンスを行い、遊び込む子どもを育てる教師の援助や環境のポイントについて共に学び合った。 ・日々の園庭環境設定時や保育後の時間を活用し、教師間で遊びについて話し合い、環境を整えてきた。 ・保護者アンケートにおいては、それぞれ、１００%、９５%、９８%の肯定的な回答を得ることができ、保育への理解を得ることができた。	・子どもが主体的に生活を進められるよう、一人一人の子どもの内面を理解し、学びを積み重ねていくことのできるような教師の役割や、遊び込むことにつながる意図的な環境づくりについて、次年度も共同園体制を生かし、教師自身が学ぶ姿勢を大切にする。	・参観ウィークの様子からそれぞれ遊びを探求している姿が見られた。 ・それぞれの子どもたちが経験し、考えたことで行動し主体性、個性を発揮しているのは園としての取組の結果であろうと評価する。
		自然とのかかわり	・子どもが四季を感じ、興味関心をもって自然に関わることができるよう、季節や学年に応じた栽培計画を立て、園庭の環境を整える。 ・身近な自然事象について興味・関心が深められるよう、発達年齢に応じた環境を準備し、子どもの興味関心や探究心、好奇心に寄り添う。	・一年を見通した栽培計画のもと、園庭環境、花壇等を計画的に子どもと共に整え、四季を感じながら直接体験を得られるようにする。 ・発達の過程に応じた図鑑や絵本等、視覚的教材を準備し、子どもが自然物と関わり好奇心、思考力、探求心を働かせる姿が増え、自ら自然に関わる姿が増える。 ・保護者アンケートにおいて、「子どもは、自然への興味・関心が深まっていると感じる」と回答した割合が、８５%以上になる。	A	・各学年栽培計画を立てた。様々な野菜を栽培し食べて、食育活動にも繋げることができた。 ・遊びの中で取り入れられるように園庭や花壇を整備した。しかし、花壇整備では、計画通りいかず、自然物に触れられない時期もあった。計画的に事前に準備して環境を整える必要がある。 ・持ち運べる個人図鑑や、月刊絵本を教材として取り入れ、好きな遊びの時間に、自ら自然に興味をもち、図鑑を見ながら様々な生き物や草花に触れ、調べる姿が多く見られた。 ・保育室に虫や草花の図鑑を手に取りやすい場所に置き、季節に応じた花や虫、自然事象（氷、雲）などの写真を掲示し環境を整えたことで、興味関心が深まり、調べたり、観察したりしていた。また、友達や、異年齢の関わりの中で教え合う姿も見られた。 ・保護者アンケートにおいては９３．７%の肯定的な回答を得られた。	・四季を感じ、虫や草花に興味関心をもって、自ら調べる、観察する面白さを感じていけるように、引く続き環境の整備や、図鑑、視覚的教材などの準備をしていく。 ・計画的に花壇などの整備を行い、自然に触れられるようにする。 ・教師自身も幼児と共に自然に事象に興味関心をもち、保育の中で取り入れて、探求心、好奇心を深められるようにする。	・園内の花が増え、プランターに植栽されている夏野菜、トマト、スイカなどの栽培体験、そして成果物を食す等は、より自然豊かに自然への関心をもたせる取り組みだ。また、その体験が、生命の大切さを学ぶことにつながっている。 ・幼稚園施設、設備を活用した園庭、樹木、そして落ち葉の自然化に取組み、子どもたちの創造醸成に寄与されていることに対し評価する。
	一人一人を大切にする教育	特別支援教育の推進	・一人一人の発達の特性や実態を把握した支援計画や合理的配慮をもとに、少しずつ段階を踏み目標が達成できるよう支援に努める。 ・保護者の抱える子育ての悩みには丁寧な傾聴を心掛け、保護者に寄り添いながら家庭との連携を図る。 ・職員間においては、学年を超えた子どもの共通理解と連携を図る。研修会に積極的に参加する。 ・必要に応じて関係機関の意見を仰ぐ。	・子どもの発達や特性に応じた過ごしやすい環境の設定や支援を行うことで、園生活を自分の力で進めやすくなる。 ・保護者の悩みに寄り添い丁寧な傾聴を行う。また、にじいろ保育にかかる保護者においては、保護者間の親睦を深められるよう、保護者懇談会を定期的に（学期ごとに１回）実施する。 ・保護者アンケートにおいて、「幼稚園は、個々の発達や特性に応じた指導を行い、一人一人を大切にした教育を行っている」と回答した割合が８５%以上になる。	A	・子どもの発達や特性および子どもの興味や関心に合わせた環境や視覚支援教材等を用いることで、安心して過ごせたり、クラスの友達と行事活動に参加できた子どももいた。 ・にじいろ保育にかかる保護者においては学期ごとに保護者懇談会を開催した。全学年で集まることができ、子育ての悩み相談では保護者間で共感の言葉がけやアドバイスなど意見交換ができた。学年末の懇談では、アドバイスを実践後、子どもの成長が見られたとの報告を聞くことができ実施できたことは良かった。 ・保護者の悩みには要望に応じて懇談の時間を設け、気持ちが少しでも軽くなるよう丁寧な傾聴に努めた。 ・研修会に積極的に参加し資質の向上に努めた。 ・保護者アンケートでは９６%の肯定的な回答を得ることができたが、当てはまらないという意見があるということもしっかりと受け止めたい。	・子どもの発達の特性や家庭環境は多様であり、一人一人の子どもに寄り添う姿勢を大切にし、保育実践に努める。職員間の共通理解と連携を図り、保護者への寄り添い、丁寧な傾聴を行う。 ・配慮を要する幼児の支援だけに限らず、幼児の興味や関心、実態に応じてどの子にもわかりやすい支援教材等を活用していく。 ・にじいろ保育にかかる保護者の懇談会は保護者間の親睦も兼ね次年度も定期的に開催を実施する。	・一人一人を大切にした取り組み、寄り添う援助や見守る援助など個々に応じた対応が素晴らしい。またユニバーサルデザイン化に意を注がれていることに対し評価する。 ・個に応じた対応が、結果、集団においてすべての園児にとってわかりやすく優しくなると言える。今後も一人一人のための教育推進が必要かと思われれる。

豊かな心・健やかな体	思いやりの心の育成	生命の尊重・道徳性の芽生え	・飼育栽培活動や身近な自然に触れ、生命を大切にする豊かな心を育む環境を構成する。 ・異年齢の関わりが生まれるような環境を作り、子どもがいろんな人との関わり方を知りながら一緒に遊ぶ中で、優しさや思いやり、感謝の気持ちに触れる。 ・教師の道徳性を高め、研修を通して人権感覚を磨く。	・園庭の豊かな自然環境に触れたり、うさぎや昆虫の世話をしたりする中で、一つ一つに命があることを知り、命を大切にしようとする姿が増える。 ・日常生活の中で、自由に他学年の保育室を行き来し一緒に遊んだり、園庭で関わりながら遊んだりする姿が増え、異年齢の友達と関わることで優しさや思いやりをもって行動するようになる。 ・保護者アンケートにおいて、「幼稚園は、誕生会や飼育栽培活動、身近な自然環境を取り入れた保育活動等、命にふれる機会を設け、命の大切さを感じさせている」「子どもは幼稚園で『人とのかかわりの中で感謝の気持ちや相手に思いやりの心をもってかかわれる子』に育っていると感じる」と回答した割合が、それぞれ８５%以上になる。 ・年に２回、人権に関する北部ブロック研修会に参加し、教師間で話し合ったりすることで人権意識を高める。	A	・意欲的に草花の水やりをしていた。 ・各学年で野菜の栽培を行い、成長過程を感じることのできる写真を掲示したり、観察がしやすい場所にプランターを置いたりして環境を整えたことで関心をもち栽培を意識する取り組みができた。また、収穫した野菜を園で食べる機会をもつことで大切に育てようとする気持ちが高まった。 ・ヤゴや青虫などの昆虫が成虫になるまで育てたり、ウサギの世話をしたりすることで命の育みを経験することができた。 ・異年齢の関わりを教職員同士が意識して取り組むことで、好きな遊びの時間に異年齢で鬼ごっこやお店屋さんごっこ等をして遊ぶことが増えた。様々な遊びや活動を通して友達の優しさ感謝の気持ちに触れ、思いやりの気持ちをもって接する姿へとつながった。 ・毎月の誕生会の中で、周りの大人からの愛情を感じ、一人一人の成長を喜び合う機会を設けることが出来た。 ・人権研修会に参加し、様々な考えや意見を出し合い、教師自身の人権意識を深めることができた。また、各学年の幼児の実態に応じた人権を考える学級懇談会を行い、保護者とともに人権意識を高めた。 ・保護者アンケートからは、両設問共に９６．９%の肯定的な回答が得られ、命の大切さや互いを思いやる道徳性の芽生えが培われていると評価された。	・引き続き、栽培物の水やりやウサギの世話、昆虫の飼育を行い、幼児が命の大切さを感じ愛情をもって世話をすることができるようにする。 ・今後も異年齢で関わる機会を大切にした保育を行っていく。 ・誕生会では、幼児 一人一人が愛情や成長の喜びを感じられるように工夫して進めていく。 ・教師自身の道徳性を磨き、人権感覚を高めるための研修会に積極的に参加していく。	・動植物とのふれあいの中で命の大切さ、また、誕生会を活用した親と子の命の繋がりや、命の大切さの気付き、感謝の気持ちや思いやりの心を醸成するため様々な人との関わりを経験させるなどの取り組みに大いに努力をされている事に対し評価する。引き続き、取り組んでほしい。
	健やかな体作り	基本的生活習慣の確立	・子どもの実態を把握し、担任と養護教諭が連携して保健指導や保健学習を行う。 ・家庭と連携を図りながら、生活習慣を身につけていけるよう、定期的に「げんきカレンダー」を配付し、親子で健康に関する目標に取り組んでもらう。 ・健康に関する情報を、意識の向上につながるよう、ほけんだより等で家庭へ啓発する。	・子どもが自らすすんで、生活習慣を身につけようとする。 ・保護者アンケートにおいて「『ほけんだより』や親子で取り組む『げんきカレンダー』は、健康な生活を意識する機会となっている」「子どもは、「基本的生活習慣や健康な生活について、意識をもち自ら取り組もうとする姿が見られる」と回答した割合が、それぞれ８５%以上になる。 ・保護者への啓発として、月１回以上「ほけんだより」を配付する。	A	・幼児期に身につけるべき生活習慣を「げんきカレンダー」の目標にし、それに応じたほけんの話をすることで、子ども自身が取り組みやすいようにしているので、頑張って取り組む姿が見られた。 ・家庭での様子を保護者に書いてもらうことで、家庭で子どもがどのように取り組み、親子でどのように工夫しているかを知ることが出来るので、今後の取り組みに繋げることが出来る。また、担任や養護教諭から幼稚園での様子等のコメントを返すことにより、幼稚園と家庭での連携が取れた。 ・アンケート結果では９２%となり、基本的生活習慣の確立に向けた実践が評価された。 ・ほけんの話では、子どもが積極的に話に参加し、自分の体を知り守るためにどうするかを考え、それを教師や友達に伝えようとする姿が見られた。	・幼児期において、基本的生活習慣の確立は、家庭との連携なしでは難しいため、今後も「げんきカレンダー」を活用しながら啓発していく。 ・親子で「げんきカレンダー」へ取り組むのが難しい家庭へは、個別指導が必要である。	・月１回の保健指導、年間１０回の親子で取り組む「げんきカレンダー」によって幼児の基本的生活習慣の確立に取り組まれ、とりわけ基本的生活習慣の確立は各家庭との連携無しでは難しい中、個別指導等、種々工夫を凝らして取り組まれており、大変なご労苦があったものと推測され、評価する。 ・「げんきカレンダー」については、家庭で取り組むと同時に、保育においても意識して取り組んでいくことが、より効果的ではないかと思われる。
開かれ信頼される学校園	教育活動への理解の推進	家庭・地域との連携	・子どもの学びを可視化できるようなドキュメンテーションの作成と掲示を行う。 ・日頃の園生活や子どもの学びや育ちについて積極的かつ継続的に園の情報を発信する。 ・小学校との連携・交流を図る。 ① 校内研究会への参加、園内研究会への参加呼びかけ等、教師間の連携を進め、互いの教育についての理解に努める。 ② 幼児・児童、双方にとって教育的価値につながる交流活動を探る。	・通用門横の掲示板は月１回程度、各クラス保育室周辺にもタイムリーに、子どもの遊びの様子、その学び等を分かりやすく知らせ発信に努める。 ・ホームページの更新を、ICT 担当者を中心に、週１回以上更新する。 ・保護者アンケートにおいて、「えんだよりやクラスだより、ホームページや掲示板、ドキュメンテーション等は、幼稚園での行事や活動の様子、園の教育方針、子どもの学びや育ち等を知るのに役立っている」と回答した割合が、８５%以上になる。 ・小学校の研究会に積極的に参加し、小学校教育の理解に努めると共に、幼児期と児童期の学びのつながりを学ぶ。また、「遊び込む子ども」を育成するために、“主体的な授業改善”から保育実践を工夫する。 ・子どもにとって、学びが深まる活動については、小学校の場を活用したり、児童との交流を計画・実施したりする。また、その価値を保護者や地域に発信していく。	A	・通用門横の掲示板や各保育室前のドキュメンテーションを、積極的に更新することができた。ホームページは平均して週に２～３回更新することができ、タイムリーな発信ができた。 ・保護者アンケートで肯定的な回答の割合が１００%であった。 ・校内研に積極的に参加し、小学校教員と学びのつながりについて、子どもの姿を通して意見交換する機会となった。今後は、より深く学び、保育実践の工夫に活かしたりカリキュラムマネジメントにつなげたりしていくかが課題となる。 ・本園の運動会を小学校の校庭で行うことで不安や抵抗を感じないように、自然散策や固定遊具等での普段の遊びでも校庭を活用してきた。それにより、環境に慣れ、安心して運動会に取り組む姿が見られた。また、運動会後に５歳児は、１年生と運動遊びを通した交流活動を小学校教師と共に計画・実施することができた。それらの経験が子どもの学びとなり、次の遊びへとつながるなど、子どもが主体となる実践に取り組むことができた。その学びを保護者や地域に発信できた。 ・双方の学習や学びとなる交流活動（１年生、２年生の生活科、学校行事の音楽会、５年生との給食交流　等）も同様に捉え進めた。	・ドキュメンテーションはそれぞれの担任が、掲示板やホームページの更新は担当者が中心となって行っている。日常的に更新できるようになっているので、次年度も保護者や地域への発信を続けていく。 ・「幼児期から児童期の滑らかな接続」をめざし、学びのつながりについてより一層学ぶとともに、その学びを本園の教育実践に生かせるように、職員間の共通理解を図り進める。また、引き続き小学校との連携や交流を深め、架け橋プログラムの推進に努める。 ・幼児・児童の交流については、今後も幼児の学びにつながることを意識し、計画実践していく。また、保護者や地域への発信についても工夫していく。	・ホームページの開設は、リアルタイムの情報を提供することが出来る利便性の高いツールである。しかし、その更新には時間とマンパワーが必要である。その上「ドキュメンテーション」での掲示、「園だより」、「クラスだより」と情報提供されるのは幼稚園業務をこなしながら、少々厳しさがあると思われる事から、ホームページのメニューを充実し、デジタル化推進の旗印としてＨＰの一本化を図るべきかと思慮する。 ・幼小連携や交流の実践については、園児や教師だけでなく保護者にとってもよい取り組みである。

	安心で安全な園作り	危機管理の徹底	・施設内を点検し、危険箇所は写真を用いて可視化し、共通理解を図る。破損や危険箇所（設備・害虫等）があれば速やかに対応・改善する。 ・遊びの中での危険やけがを防ぎ、安心・安全に幼稚園生活を送れるように、危険箇所を報告しあい、職員全員で共通理解且つ改善に努める。 ・学校安全計画、事件事故への対応マニュアル及び防災計画、洪水時の避難確保計画を職員全員で確認する。 ・様々な事象を予想した避難訓練（洪水、火災、地震、防犯）・通報訓練（火災、県警ホットライン）を実施する。 ・緊急メールを活用した緊急時の保護者への連絡と引渡しの訓練を実施する。	・計画と子どもの実態に即して園児への安全指導（日常の生活、幼年消防クラブ活動、交通安全指導含む）を行う。 ・職員の危機管理意識を強化するため、日常ヒヤリハットを迅速に伝達し合い、改善策を素早く話し合う。 ・破損や危険箇所の改善に向け毎月１回安全点検を実施し、迅速な対応を行う。 ・園児が安全に過ごすことができる安全点検、日々の環境設定を見直し、子どもへの指導の機会を増やす。 ・保護者アンケートにおいて、「幼稚園は、安全を意識した改善を行い、遊びを通して学ぶ場として、子どもが活動しやすい環境を整えている」と回答した割合が、８５%以上になる。 ・年５回避難訓練及び通報訓練を実施し、反省点を踏まえて実践につなげるとともに、マニュアルや各計画を見直す。 ・安全カード、一斉メールを活用した保護者への連絡と引渡しの訓練を実施し、実情に応じた対策を検討する。	B	・子どもの実態に即して計画通りに行うことができた。５歳児の幼年消防クラブ組替式や幼児交通安全教室も子どもの意識向上を図ることにつながった。 ・安全点検を毎月行い、経年劣化による破損を除去したり、危険個所はすぐに対応したりした。 ・子どもの思いがけない怪我など、有事の対処については、危機管理マニュアルを活用し、第１発見者からの伝達、迅速な対応、教師間の連携、他の子どもへの指示・誘導など職員誰もが対処できるようにすることが必要である。 ・保護者アンケートで、肯定的な回答の割合が９６．８%であった。 ・避難訓練を計画的に行えた。警察官を招いて職員対象の不審者対応の防犯訓練を行ったことは、死角になりえるところへの対応や質問等、本園ならではの実施で効果的であった。また、地震時の引き渡し訓練では、保護者の引渡し時間等隣接する鴻池小学校と打ち合わせ、共同実施することができ、スムーズに行えた。今後も連携を図っていく。	・自然災害等は予測できないことも多い。訓練や安全点検等を引き続き計画通りに行うと共に、有事の際に対応できるよう危機管理マニュアルの共通理解と活用など職員の危機管理意識の向上を図る。 ・園区が広がり、自転車通園が増えている。子どもだけでなく保護者のヘルメット着用も引き続き推奨していく。 ・川沿いの本園フェンス沿いの無断駐車が増加している。適宜対処していく。	・避難訓練の実際を拝見した。その様子から園児が指示や内容を理解していたと思われる。 ・安心・安全に係る対策は、多くは予測できない状況から突如生じる危険に対し、如何に行動が取れるかにかかっており、それを補足するには、危機管理の為の意識の向上、体験、訓練が重要であり、それだけに多くの取り組みをされ、効果を上げられていることに対し評価をすると共に、とりわけ３歳児園児の安全対策にはご苦労があろうかと思われる。

学校関係者評価総括

・参観や行事を拝見し、子どもたちに表情が生き生きとしていることが印象的だった。各学年によって、発達の過程が違うことがよくわかると共に、それぞれ子どもの実態に応じた教師の話し方等指導方法が違うことにも驚いた。

・上記のとおり重点目標の各項目における重点項目について、総じて肯定的評価をさせて頂いたところであり、今後も各項目で上げられております改善策に対し、具体の取り組みを期待する。なお、幼稚園業務において、多忙極まりない様子が見て取れる中、今後とも園内での各事業別評価を職員全員で意見交換され、新たな取り組み、不必要な事業の見直しなど、スクラップ・アンド・ビルドの方針で業務改善が行われることが肝要かと思われる。振り返ってこれらが本当に必要な事務、事業であったかを職員相互で検討され、支障を来さなかったものはすべて簡略化、または廃止されては如何かと思考する。園児たち一人一人が先生方を観ている。その思いや育ちを受け止め保育に邁進されることを今後も期待している。

次年度に向けた重点的な改善点

・安全・安心にかかる園運営について、職員の意識向上に努め、更なる危機管理体制づくりを推進する。

・子どもの主体性の育成すなわち「遊び込む子どもの育成」に向け、保育実践の充実を図る。また、「遊び込む子どもの育成」にかかる保育環境の構成や異年齢とのかかわり、小学校との接続等についての取り組みを充実発展させる。

・保護者や地域に向けて、幼児期の教育及び本園の教育理念や活動等において理解推進を図る。

・教師の働き改革において、業務内容の見直しや改善をその都度実施していく。

自己評価の基準　　Ａ：目標を上回った　Ｂ：目標どおりに達成できた　Ｃ：目標をやや下回った　Ｄ：目標を大きく下回った